
夏祭り

島野 秋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り

【Nコード】

N4535I

【作者名】

島野 秋月

【あらすじ】

高校生活最後の夏祭りを私は一人で歩いていた。
好きだった先輩とは、もう三か月も会っていない。
先輩は卒業してしまったから……何故告白できなかったんだろう。

とぼとぼ歩いていると、声をかけられた。
振り返った先にいたのは……。

（前書き）

初投稿の作品です。

以前、友人たちと夏祭りをテーマに小説を書いた時のものです。ちよっとくさい台詞がでてくるので気をつけてください（笑）ワードからコピペしてあるので、横書きの方が読みやすいかもしれません。

後ろを振り返るとそこにいたのは……。

「先輩？ですか？」

「おう、先輩だ。久しぶり！」

そこにいたのは、昨年まで高校の先輩だった『成兼愁利』さんだった。

その事を脳内で認識するやいなや、私の胸は高鳴りはじめた。

鼓動がいつもの二倍ぐらい速い気がする。嬉しいのか恥ずかしいのか、体が火照ってくる。これはいつもそうなのだけれど、顔を直視する事ができず、視線はキョロキョロとさまよっている。しまいには何だか気恥ずかしくなつて俯いてしまった。

ああ、そうなのだなと。久しぶりに嬉しい感覚だなと。

うん、改めて再認識した。

先輩への恋。

「あ、はい。お久しぶりです！」

「いやあ〜三カ月ぶりぐらいか？なんだか、月日の流れて早いよなあ」

「は、はい。そうですね」

実を言うと、その問いにはイエスと答えたくなかった。

それはだって、先輩と過ごしていた日々比べたら、この三ヶ月間の月日の流れは嫌味なくらいに遅かったのだから。同じ部活で一緒に過ごしている時は、あっという間に時間は過ぎていったのに。

「そういえば、もしかしたら今一人だったりする？」

「え、あ、はい。もしかしなくても恥ずかしながら一人です」

大体何故、私は先輩より一年遅れて生まれてしまったのだろう。

それが本当に悔やまれる。だって、同じ年に生まれていたら、きっと今日みたいな日は当然の如く私と先輩は一緒にお祭りを楽しんでいただろう。

一年遅く生まれたせいで知り合っのが遅かった。一年遅く生まれ
たせいで、私より先に遠くに行ってしまう先輩。それは言っしま
えば、きりがないのだし、生まれる年なんて自分で指定できないの
だから、考えるだけ無駄なんだろうと思う。だけどそれを考えるの
が人間であって、そこが面白いのだと思う。

この考えを世間一般の皆さまからに伝えたら、皆苦笑しそうだな
それもとびっきりの苦笑。苦すぎて、もう笑いにもなってなさそう
だけど。

そう考えている自分に苦笑してしまう。

うん、やっぱりもう苦笑を通り越して、ただの苦にしかなくてな
い。

「だったら一緒に祭り回らないか？いやあ、俺も一人で来たんだけ
ど、なんてゆうの？やっぱり祭りって一人で来るもんじゃないうて
言っのを実感したよ。何か悲しいけどな」

「はい、いいですよ。喜んで一緒に回ります」

そう言っつと、先輩は『ああ、ありがとう』って満面の笑みで言っ
た。

でも、ありがとっつて言いたいののはこっちだ。

だって、先輩のその笑顔。素敵すぎる。

きつとラブ&ピースと書かれたTシャツを先輩が着ていたら、う
ん、誰もがその言葉の意味をしつかり理解しそうだ。

うんうん、今年の二十四時間テレビの司会は先輩で決まりだろう
とすると、もうこの祭りの中には、テレビ局関係の人が一般人を装
っつて一杯いそうだ。きつと皆殺気にも近い気を放ちながら、先輩を
スカウトする絶好の機会を狙っつてるんだろう。

「お、りんご飴だ。買っつてかない？」

「はい。りんご飴っつておいしいですよね」

「おっちゃん、りんご飴二つね。大一つと小さいの二つ」

どうやら先輩は気を遣っつて、私のぶんは小さいサイズのを頼んで
くれたようだ。

初めてりんご飴の大を見た時は、その大きさに驚愕して手がだせなかったが、小さいほうは本当に小さくて可愛らしいので、食べないで二日間取っておいたことがある。

だけど本当に残念なことに、いつの間にかそのりんご飴は妹の胃袋の中に収まっていたのだった。

財布からお金をだそうとするが、もたついてしまつて中々硬貨が手に収まらない。仕方ないのでお札を取り出そうとした時、何故だか小さいりんご飴が目の前に差し出された。

「ほら、すみれの分」

「え？でも、私お金」

「いいっていいって。こんぐらいなら俺が奢るからさ。てゆうか祭りなんだし、女の子にお金ださせる男つてもなんかイケテないだろう？」

「ふふふ、そんな事はないと思いますけど。では甘えさせてもらいますね」

りんご飴を受け取ると、さっそくほおばる。

ちようどいい甘さにほどよい酸味があつて美味しい。それに加えて、先輩の驕りという調味料が尚更美味しさを増しているような気がする。

「ふむ、うまいな。だがしかし………なんというかデカイよな」

「はい。そうですね」

「でも、りんごがデカイだけで飴の部分なんてすぐになくなるんだよな」

「確かにそうですね」

何気ない会話をしながら、適当にうるついていると、先程より混雑が増してきた。

そういえば、そろそろ花火が始まる時間だ。花火目当ての客も集まってきたのだろう。

その花火目当ての客が私にとっては不思議でしょうがなかった。

家が近くで、毎年花火を見てきたせいもあるだろうけど、わざわざ

ぎ電車に乗って見に来る人の気持ちがわからない。確かに綺麗なだけけれど、ここの花火は特別優れたところがあるわけでもないし、隣の県に花火で有名な所がある。行くのだったら、そちらに行けばいいと思うのだ。

そうすればもっと人が減って、私と先輩も楽に祭りを楽しめると思う。

なんて自分勝手な事を思っていると、大きな音がする。空を見ると、なるほど花が咲いている。

どうやら花火が始まったようだ。

「うわ、でけえ音。ちよっと近すぎるな」

「はい、そうですね。街中だと建物が邪魔して、花火あんまり見えないですね」

さほど大きい建物があるわけでもないが、見えた花火は本当に少しだけだった。綺麗さも何もあつたもんじゃない。これではただ単に鼓膜を痛めつけているだけだ。

別にそれはそれで構わないのだけれど、こう人が多いのと衝撃音でかなり疲れが体を支配してきた。正直もう歩きたくない。それに花火の音で先輩の声がほとんど聞き取れないのだから、ここにいる意味はないのだと思う。

それを察してくれたのか、先輩は大きな声で「祭りはもう出ようか?」と言ってくれた。

当然の如く私は、それに頷いて先輩の後についていった。

混雑のせいで人混みを抜け出すのに、三十分以上もかかってしまった。

もう駄目だ。足が本格的に痛い。

「大丈夫?」

「え、ええと、少し大丈夫じゃないです」

「ふうむ、じゃあその公園で休んでいこうか?」

「はい。お願いします」

小さな公園だった。滑り台と砂場、それにブランコしかない。ち

なみにベンチもない。

仕方がないのでブランコに腰を下ろす。

少し揺ら揺らするので座りにくいだが、座ればどこでもよかった。「いやあ、やっとなんか落ち着けるな」

「はい。助かりました……」

人っ子一人いない夜の公園。当然といえば、当然だ。公園なんて子供が遊ぶところだし、今日は祭りの日だから公園にたむろする奴だっていない。

となれば、まあ、公園というのは大人の場所に変化する。

ドラマや小説などでよくあるが、夜の公園というのは告白に使われることが結構あったりする。多分間違いではないだろう。ただ、実際公園で告白を受けたという話は聞いたことはないけれど。

だけどまあ、それでも私は期待でドキドキしていた。

偶然公園に來ただけなのだけだし、そもそも久しぶりに再開した先輩と後輩というだけの関係だけれど……それでも期待はしてしまっ

たぶんだけど、先輩は私に告白はしてくれないだろう。

うん、それは間違いないと思う。

だから私の期待というのは、告白をOKしてくれるんじゃないか？というものだ。

本当は告白なんてする気はなかった。高校で一緒に過ごしていた時だって、そんな事は思いもしなかった。

でも、先輩がいなくなつてから気づいた。

高校の時は、当たり前のように先輩はそばにいてくれたから、これからもずっとそばにいてくれる気がしたから、それは先輩が告白してくれる事を期待していたから、私は自分から告白する気がおこらなかつたのだと思う。

でも今は違う。

もしかしたらこの時間が終われば、もう二度と会えない可能性だつてある。

会えたとしたって、もう告白はできない状況になっているかもしれない。

だから今夜ここでしよう。

「ここからでも花火は、よく見えるな」

「あ、え、あ！そ、そうですね」

そういえば私は、いつから先輩の事が好きになったのだろう。そして好きになった理由はなんなのだろう？

先輩と出会ったのは高校入学して、部活に入部した時だ。

ちよつと人気がない部活で、普段から活動しているのは私と先輩だけだったなと思い返す。少し寂しい部活だったけど一緒に活動している時は、親友と遊んでいる時より断然楽しかった。逆に部活がない時に親友と遊んでいても何か少し物足りなさを感じた。何が違かったのだろうか？考えてみるが思いつかない。

ただ普通に先輩と過ごしていた日々。

気づけば、この心には先輩が大きくうつっていた。

いつから？理由は？

うん、わかんないや。

別にいいか。それがわかったところで、何も変わりはない。

私が先輩が好きであることになんら変わらない。

「……」

無言で花火を見続ける。

色とりどりの花火が目を楽しませる。別に夢中になる程綺麗だったわけではないが、それでも何故か花火を見続けた。毎年同じような花火。もう散々見た花火。正直見飽きているから、どうでもいい。だけど見てしまうのは、やっぱり隣に先輩がいるからなんだと思う。だって先輩と一緒に見る花火は初めてだから。うん、新鮮だよ花火。見たこともないくらい綺麗だよ花火。何にも会話はなくても、幸せを感じるひと時。

花火が終わりを告げると、この幸福な時間も終わりを告げようとしていた。

静かになった公園。

このまま何も言い出さなければ、幸福は終わるのだろう。
でも考える。

断られたらどうしよう?と。

考えたってしょうがない。悪い方向に考えれば、本当に悪い結果
になってしまう気がする。だから考えたくない。

だけど考えてしまう。

それが人間だから。でも、だから人間て面白いんだと思う。
考えれば考えるほど、勇気なんてでなくなるけど、でも希望だっ
てあるから。

人の足を止めるのは、絶望とかそんなんじゃないやなくて、諦め。

つまり、もうどうせ無理だろうと思ってしまうことで、私の人生
はそこで一生足踏みを続けることになると思う。

もし断られて、絶望したって、うん、前には進めるだろう。

だから、そう希望を探す意思を持って。

うん、告白しよう。

「あ、あの先輩!」

「ん?何?」

「その突然で申し訳ないんですけど!私とつきあってください!」

私の胸はドキドキと高鳴り、もう心臓は張り裂けそうである。

早く答えを聞かなければ死んでしまいかもしれない。

「え、ええ、ええええ!う、嘘。それ俺に言ってるの!?」

「は、はい!そうです!」

「そ、そうなの……え、えっと、こ、困ったな」

その言葉を聞いた瞬間、私の視界は信じられないほどに歪んだ。

そうか、これが絶望?人に言わせてみたら、大袈裟なんだろうけ
ど、私にとつたら大袈裟でもなんでもない。それぐらいに先輩の事
が好きだから。

わかんなくてもいい。いつかわかると思うから。

「い、いや、な。嬉しいんだよ。だけどさあ、うん。俺、うん。え

えとだな。今は全然そんな気持ちないって言うか……」

もう、いつそのことここで先輩を無理矢理押し倒して、既成事実を作る？

……ばっかみたい。そんな愛がない事するぐらいなら死んだほうがマシだ。

「違うんだよ？すみれの事は好きだ……なんてゆうか俺自分に自信がないんだよ。だからさ、えっとなんだ？ああ！もう、えっと正直に言うぞ！？……お、俺はすみれに告白しようと思ってた」

その言葉を聞いて心臓が跳ね上がる。

「自分に自信が持てたらの話なんだけどな！だけど高校の時も今も自信は持ててないんだ。だからさ……今はごめん」

そう言っ頭を下げる先輩。

でもすぐに顔を上げて。

「でもいつかは、自信がもてたらいつかは……その時は俺から言わせてくれよ」

そう言った。

そうか。

時期が早かったんだな。

よかった。

うん、よかった。

だって先輩も同じ気持ちだったんだから。

よかった告白して。

気持ちを聞けたから。

「はい。じゃあ、先輩は私が予約しておきますね」
ぼろぼろ涙を流しながら言った。

いつの間にか泣いていた。

信じられないくらい涙が流れてくる。

ついでに鼻水もでてしまってるかもしれない。

「お、おう。ええと、じゃあ予約の証明でもするか」
そう言った先輩の顔が急激に大きくなって……。

うん、大人だ。

そう、大人だ。

つまりキスだ。

嬉しい。

嬉しすぎる。

だけどいいのだろうか？泣きながら鼻水だした女とキスさせてしまつて？本当は嫌なんじゃないだろうか？

まあ、だけどいいか。

ハッピーなのだから。

終わり

(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます。

くさい小説ですが、自分が書いた小説ではお気に入りの作品です。
自分は恋愛経験もないし男だからちょっと嘘くさい内容になってしまいましたがね。

女の子を書くのは難しい(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4535i/>

夏祭り

2010年10月8日15時07分発行